

P2-018

施設で生活している障がいのある人の母親の高齢期における体験

松澤 明美¹⁾、山口 麻衣²⁾茨城キリスト教大学 看護学部 看護学科¹⁾、
ルーテル学院大学 総合人間学部 人間福祉心理学科²⁾

【背景】 少子高齢化が進むわが国では、障がいのある子どもとその家族は健康な子どもの家族とは異なるライフコースをより長期的に辿ることになった。しかし障がいのある子どもが成人期を迎えた際、高齢の母親がどのような体験をしているかは充分明らかになっていない。

【目的】 本研究の目的は、施設で生活している障がいのある人の母親が、高齢期にどのような体験をしているのかを明らかにし、これらの母親を含めた家族への支援のあり方を検討することである。

【方法】 施設で生活する障がいのある人の60歳以上の母親2人へインタビューガイドを用いた半構造化面接を行い、質的記述的に分析した。データから逐語録を作成し、複数回精読し、意味内容に着目してカテゴリ・サブカテゴリを作成した。そのうえで2人の研究対象者それぞれに、結果の内容の妥当性についてのメンバーチェックを行った。さらに結果は共同研究者と討議のうえ修正した。また本インタビューは研究者所属の倫理審査委員会の承認を経て実施した。

【結果】 本研究対象者はグループホームで生活するダウン症候群・知的障がいのある息子の70代の母親と、重症心身障がい者施設で生活する脳性まひの娘の60代の母親の2人である。分析の結果、施設で生活している障がいのある人の母親は高齢期において、【子どもの加齢による身体の変化を感じる】【子どもが親から離れて自立して生活する】【子どもの生活をそばで支える】【生活のなかで子どもが親以外の支援とつながる】【子どものケアの質に伴う心理的負担がある】【子どもが地域で包括的なケアを受けられることを望む】【親の役割の代替を期待する】【将来への不安に直面する】という体験をしていることが明らかになった。

【考察・結論】 本研究の結果から、施設で生活している障がいのある人の母親は、子どもの加齢に伴う変化と自身の高齢化による健康問題、将来の不安に直面していた。また子どもが施設での生活となり、自身が高齢期になっても、母親の親としての役割は継続しており、質の高いサービス提供を希望していた。これらのことから専門職は、親の健康状態や将来を見据えた母親と家族の生活への希望に着目して支援を検討することが必要である。また子どもに障がいがある場合には長期に及ぶライフコースのなかで、子どもと親がそれぞれの発達段階に応じた生活や親子の関係となるよう支援する必要性が示唆された。

P2-019

健康障害をもつ子どもと家族のレジリエンスに関する文献検討—先天性疾患の子どもと家族に焦点をあてて—

伊藤 茂理¹⁾、河上 智香²⁾、天野 里奈²⁾、小川 純子³⁾、湊田 明子⁶⁾、大堀 美樹⁴⁾、今江 沙織⁵⁾、石原 奈未子⁵⁾、出野 慶子²⁾、大橋 一友⁷⁾東邦大学 健康科学部 看護学科¹⁾、
東邦大学 看護学部 看護学科²⁾、
淑徳大学 看護栄養学部 看護学科³⁾、
東京医療保健大学 医療保健学部 看護学科⁴⁾、
東邦大学医療センター大森病院⁵⁾、
東海大学医療技術短期大学 看護学科⁶⁾、
大手前大学 国際看護学部⁷⁾

【目的】 先天性疾患をもつ子どもと家族のレジリエンスに関する国内の研究動向を整理する。

【方法】 過去10年(2008年～2018年)の文献をデータベース(医学中央雑誌 Web, CiNii)上で、「先天性」、「子ども」、「レジリエンス」、「家族」をキーワードとして組み合わせて検索し、原著論文のみを分析対象とした。

【結果】 論文16件が該当し、9件が対象となった。論文の年代は2011年1件、2012年2件、2014年2件、2016年1件、2017年1件、2018年2件であった。研究デザインは質的研究5件、量的研究2件であり、混合研究2件であった。研究対象は、母親(妊婦を含む)7件、両親1件、祖父母1件であった。子どもの疾患は口唇口蓋裂などの外表奇形を伴い外科的手術を要するもの、食道閉鎖症などの外科手術により根治が見込めるもの、神経疾患や筋疾患などの在宅で医療的ケアを必要とするものなど多岐に渡っていた。子どもの発達段階は、乳幼児期6件、乳幼児期～青年期2件、思春期・青年期1件であり、子どもの自立には母親が職を持っていることが影響要因であった。

時期に関わらず、胎児診断や出産後の病名告知は、親にも祖父母にも強い衝撃となり、急激に低下した感情からの立ち上がりには個人差がみられたが、子どもに対する肯定的な感情や、周囲からの支援を認識し、回復する傾向がみられた。家族単位では、思いやりや関わりといった非言語的コミュニケーションの影響が強く、家族間での相互作用を促すことの重要性が示唆されていた。

【考察】 研究対象者が記憶を想起しやすいためか、子どもの年代は乳幼児期が多かった。先天性疾患を持つ子どもの母親への支援として、看護師が母親に出産前からの計画的な支援を行い、早期からのボンディングの形成を促進することが重要である。また、児の尊厳が守られるようなケアや、子どもとの関わりを促す援助、在宅療養に必要な手技を習得することにより親役割を獲得する一面がある。そして、祖父母やきょうだい児も含めて家族間の調整を図り、家族の凝集性や家族機能を促進し、他の患児の親との交流の機会を設けることが必要である。さらに、子どもの自立を促すためには、社会環境を含めた整備が必要であり、家族の健康状態を良好に保つことがレジリエンスを促進することが示唆された。

本研究は JSPS 科研費 17K12374 の助成を受けて実施した。